

百人一首一夕話

一

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28

新見
蔵書
印

大内
印

を病に堪能なり
一の乃を付ぬき得た
らぬ人おのつゝもの
毎小波りくもさるく
そ是もあに百人一首

こいつをきくにむ
ふとふ傳り雅うは
めあはれく教と筆とを
はるを筆とめり
きけやけりも冠波わ

なれ尾詩雅が彼えり
何處り人より有つ事
一巻の中にも世ふ
先んと世方漢うをれ
藻のうに云りいあ

一夜うつら寝るも横たへ
らぬあつて世の中
むとて市にゆく古風
実ふ身とあつて好も
志の志のせつねに子

飛らぬ中かみよめ
夫業むとてなほ
ひきつゝ海をわき
そむるにかな

波龍主人

百人一首一夕話卷之一

目錄

天智天皇 ごせいのや 御製譯

中大兄皇子錄足_レ因_レ結_レ一話

大極殿小入鹿を斬_レ話

朝倉山木九殿の話

持統天皇 ごせいのや 御製譯

大友皇子謀及の話

宇治橋合戦の話

柿本人麿 うけのり 歌譯

人麿傳系説_レり話

人麿二人の妻の話

蝦夷父子乱を起_レ話
古人皇子謀及の話

大海人皇子東國へ落_レ下_レ話

持統帝遠方行幸の話

石見人麿の子孫傳り話

筆柿の話

やまこ
大和人麿の骨殖納う話
やまのあらし
山部赤人 歌謡

赤人丸と山柿とり話
猿丸太夫 歌謡

うし削道鏡の話
中納言家持 歌謡

氷上川継謀反の話

家持美男の話
あべのたけすけ
安部仲麿 歌謡

遣唐使の話

仲麿安南へ漂着の話

和歌會は人麿の係と掛う話

海北若冲赤人事跡考の話

白壁皇子老幸々太子とすう話

早良親王種継被殺りたう話

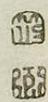
吉備公唐より帰朝の話

仲麿の後者唐女と娶う話

小竹

明徴作意 旁及故事
歌道可講 異聞兼備
一夕之話 百人々詩
蘿月片影 桂林一枝

小竹散人題



江家次子曰
寬平九年
以來於龍
尾道東階
上移御也
敷筵於
御輿東邊
其上昇居
腰纏御

三

そつづつ勒とうけ給へ
つゝ大極殿乃
額をかきたり

[illegible]

應天門



傳

源信 業

罪伴

伴大納言(画巻)
物及之(拾遺)
小(之)



して苦勞がもううしろうしろにこれだけ天子の御身までもなや
 作せとていふに没すいふうへ天皇の御身をおくしただけ
 なかりうしろうしろなやとていふに百姓の辛勞をいふにせ
 ば殿意の御身までも衣ひなされさう社の御身でもいふに衣
 ひなを衣と一字の訓はなやうなるものはいふにあなうへこそ
 といふ

天智天皇の話

白王極女帝の時、時藤、我の報夷大臣なりけむ、其子入鹿、天下の政を
 纂りんとす。下つる所、其れと中津の鎌足んと、よく憤り、惡まれ
 けむとも、入鹿の勢強太く、輕く敵對し、故常々齒を

切て虚病を構へと島より所は引籠りて所を並り時皇極帝
 の弟弟輕の皇子と稱し孝徳天皇脚の病ありてを並も泰内しれず
 たりりりり平生錦足と市中よりりりり錦足時輕の皇子のふ
 きあてて宿直せしせしなり又皇子錦足の意氣さく是より天下
 万民を匡一救ふべき器量なり所はありけり市鍾愛の市女松
 鍾足はめりせせしめて鍾足これと感して或時皇子の舍人より語て
 いて下官殊は君の恩澤を蒙るを辱くす願ひ皇子は以て天下
 のことなりなり是より恩は酬ひしりりり舍人よりは皇子は上
 りれを皇子もひろふ悦せしめて鍾足又當時の王宗のすて器量
 なる君は見えしなり功名をたてりりりり故當今皇
 極帝の市子中大兄の皇子と稱し天智天皇聰明なり人君の大度あり
 すす知んこれ固みなりりり思ふれりりり其心底を明しなり

へき隙をねらひてさうけふ大化の時の好むの頃中大兄皇子は興寺の
槻の本の下より鞠の市遊ばりてふ後にも伺ひせりとてさうす
大兄皇子の所當鞠をつきて脱るるを鑑皇直はさうの彼所當と
取て手は舟中前より跳ててさうの捧けらるる大兄皇子も驚く
これ取らうとこれ我睡ひのころとてさうの隔かゝる
はさうの今心は博く我隠しけりさうのやうなわかれ
も他人の耳目は憚りて時の博士南淵先生の所はさうの
る託け大兄皇子と鑑皇直と金中往還の向うと肩比へる
我謀るはさうの鑑皇直のやうとてさうの白皇子の所はさうの
りさうの鑑皇直議してさうの大事我謀るは輔佐の人
うさうの藤我の倉山田麿のむすめ我納く君の妃となり婚姻
の眠となりてな太く我陳説彼とさうの計りと成の

れう近きいりてさうのれうを大兄皇子大は悦て其議はほひたま
へ鑑皇直をさうの倉山田麿の家は付く媒せりて倉山田も
大は歡ひて其むすめ大兄皇子はさうのれう倉山田はさうの
内さうの計となりて此時藤我大臣蝦夷子入鹿は甘藷の園は
大が家もと起双(父の蝦夷の家と宮内と称し己の家は谷の
と稱し己の男子は子稱し己の女子は子稱し家の外はさうの集土
を構へ門の傍は兵庫河他と常は力として兵具我持せりて
又蝦夷も又長直り者も令とて取傍山の東は家我造り池と穿
城と化し庫我起り弓箭を儲へ常は五十人の兵をほく其身を
も養せり其餘万の儀式を禁中さうのて殆反逆のさうを
りてさうの今六月三韓より日本へ進調とさうのりりれと
中大兄皇子はさうの倉山田麿はさうのひはさうのさうの三韓より

我帝はまゝ表文と所前はたゞ讀唱す役とゆへ令す下ゆへ表文と
よめりて向は鐘と計りて入鹿と斬んぬりて其日なりけり
天皇大極殿は出陣り中大兄皇子は所兄古人皇子共玉座の
より侍はす鐘は〇〇入鹿疑ひなき性々晝夜劔と
今日の昇殿はたとうと帝劔と解ありて入鹿はなりて哭いて
劔と解く所前は思ひせりて倉山田磨席は進みて三韓の
表文は讀唱す向は大兄皇子より起り衛門府の官人は令
禁裏の十二門に録めさせ人の仕来と絶りて長き槍と
執り殿の傍は隠れし鐘ははろ矢を打ち加勢の用意せり
又犬養の連勝磨は三韓より進調せ箱は二振の劔をかく

入る持て倉山田磨は表文と讀の時は當りて彼箱の中
より而の劔と佐伯連子磨と葛城の稚犬養の連綱田と西人は投与へ
ん所合せ入鹿を不意に下り令せられし人れをとりて
かくて倉山田磨は三韓の表文既より傳へんとすも子磨等も入
鹿は恐るゝ起りて倉山田に流し汗渾身より
如声乱れ手取ひれ入鹿怖るゝ何れなりし人のや
向は倉山田より玉座より傳へりて其日の思ひは
流しはるゝ中大兄皇子子磨等も入鹿を威す進りて
入鹿は吐き一声けりて其相圖はしむる不意なり
入鹿はより肩先けて斬られ入鹿は起りて子磨又劔と
揮ふは片足斬倒し入鹿は玉座を轉ひて其日の思ひは
眾は明きなり天皇も大に驚かせし中より

詔して何ゆふりて大兄皇子入鹿とてさうや作やせりれを
大兄皇子平伏して奏しけり入鹿の陰謀を企て朝家預
減し日嗣の所位を傾けんとせんゆきをかくさひけり豈天
位に以て大臣を代へ侍んやのなほひりれを天皇言ひせり
直玉座を起て殿中へ入侍せりれを子膳綱田のち入鹿と
めけり利よりして中へ大兄皇子は法興寺に馳入り城を構へ備を
してさひりれを諸皇子諸卿も大兄皇子はほひりてさ護
れり大兄皇子一人は私宅を去りて白を柱におけりすも
入鹿は横死せりけりけり入鹿は死骸預父の蝦夷に賜せりれは
蝦夷は漢直等眷属を振聚め甲冑懷き兵器を持せり蝦夷は
助け軍陣を設け大兄皇子よりとびせりし將軍巨勢徳を以て
入鹿罪を誅し伏せりと諭しけりれを蝦夷は後黨の者

も罪せり大兄皇子は忍びて一同遁去ぬる蝦夷は我子入鹿の
大兄皇子は討てり大兄皇子は恨むる甚きなりけりれをやうく
其家は討手とけりけり誅は伏す時大兄皇子は蝦夷の家をけりて
朝廷よりけりけり天下の記録國紀天皇紀其外海室の類とて
大兄皇子は焼失しり船の吏恵天を大兄皇子は入國
紀とて取りけり大兄皇子はけりけりけりけり日本先代の記
録とて取りけり焼失しり大兄皇子はけりけりけりけり
さうなりけり其後大兄皇子は中へ大兄皇子は譲りんとけり
めりけり大兄皇子は退りけり大兄皇子は語りけり大兄皇子は
今古人の皇子は君の所見なり輕の皇子は君の所見なりあつてこれと
さうなりけり君天位を受つてけりけりけりけりけりけりけりけり
子天位はすめり恭讓のころけりけりけりけりけりけり大兄

皇子はく鎮星の教にあらはれしむる所母帝より
奏しなむとて帝輕の皇子に詔して所位と授けんとす
輕の皇子固く辭し古人の皇子は讓りて古人皇子より
何う天皇の詔は遠く髪と截て吉野山に入らしむれと輕の皇
子も今せんむとて所位と授けんとすこれ孝徳天皇より
孝徳帝即位の後中大兄皇子と皇太子と定め鎮星内方より
詔し所國よりめらしむる其子の古く皇子謀反と企て
これハ古人皇子よりハ鹿と睦みりハ鹿と保せしむる
死といひれしより謀位と辭すハ何けと髪と斷て吉野
山に入り謀反して獲我物部の推子等と相謀り禁裏と詔
しこれハ吉備の笠垂よりすの山に於て皇太子中
大兄は告ちよりすこれハ軍兵にけりハ古人皇子を付せ

れハ古人は自殺しなむ其ハ白雉五年十月孝徳天皇
はひけと皇極帝重祚しなむハ齊明天皇より行
やハ乙未の十二月新羅と百濟と合戦しハ百濟の將軍
福信援兵ハ日本にすより天皇兵にけり百濟とす
ハ乙未の五月帝筑前の國に幸しなむハ朝倉の
ありし軍兵を集め甲兵と修め鮮ひ兵糧と儲け設け
百濟と戦ふハ乙未の五月ハ乙未よりハ乙未よりハ
乙未其頃中大兄皇子ハ母帝より從ひて朝倉の
ハ乙未倉のハ乙未山中ハ乙未せしむるハ乙未材木
ハ乙未九本のハ乙未建せしむるハ乙未は時の人思
ハ乙未朝ハ乙未中ハ乙未中大兄皇子ハ乙未所
ハ乙未朝ハ乙未中ハ乙未中大兄皇子ハ乙未所
ハ乙未朝ハ乙未中ハ乙未中大兄皇子ハ乙未所



序 幼名^{なな} 鶴野^{うの} 讚^{かん}
良^{よし}の白王^{しろおう}す^すと^と也^や
序^{しり}又^{また}天智天皇^{てんちてんかう}序^{しり}
母^{はは}大^{おほ}臣^{おみ}獲^と我^{われ}山^{やま}
石^{いし}川^{がは}磨^をの女^{をの}なり^{なり}天^{てん}
武^ぶ天皇^{てんかう}の皇^{みかど}后^{ごう}と
な^なせ^せな^なふ^ふは^は
帝^{てい}位^いを^を即^{すなは}ち^ち文^{ぶん}
武^ぶ天皇^{てんかう}の大^{おほ}室^{むろ}と
率^{ひつ}二^に朋^{ほう}を^をな^なす^す
所^{ところ}謚^{みことな}を^を高^{たか}天^{てん}原^{げん}廣^{ひろ}
野^の垣^{かき}天皇^{てんかう}又^{また}持^も統^と天^{てん}
皇^{かう}く^くも^も稱^{なづ}ふ^ふ

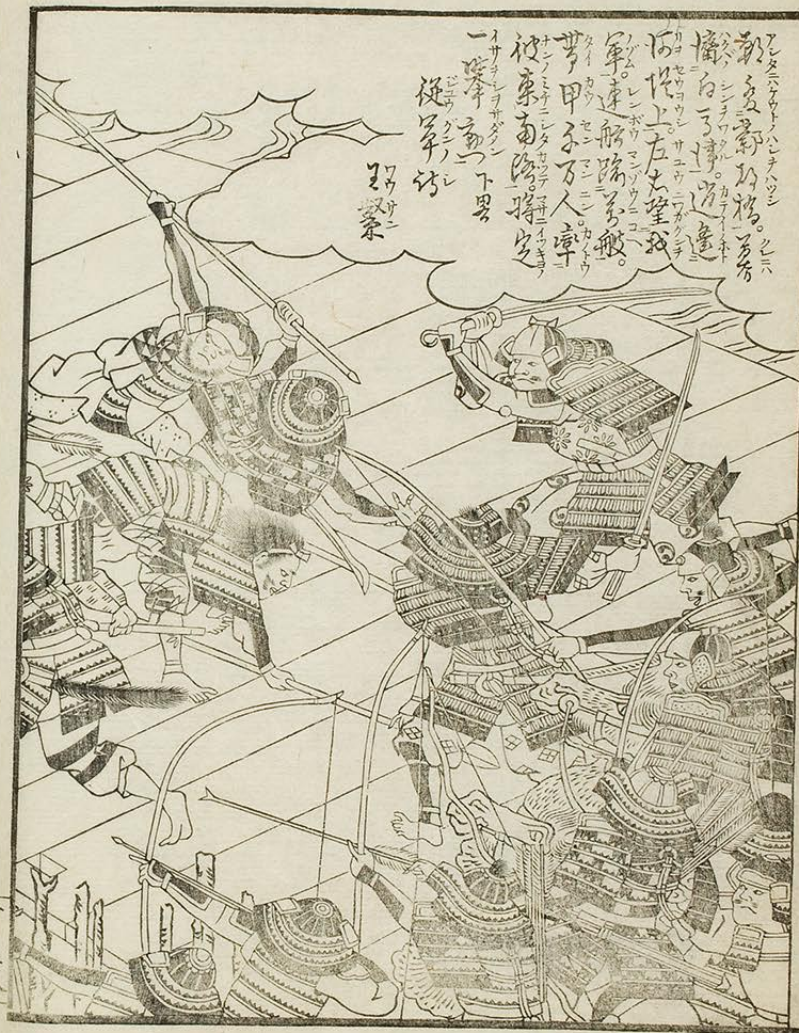
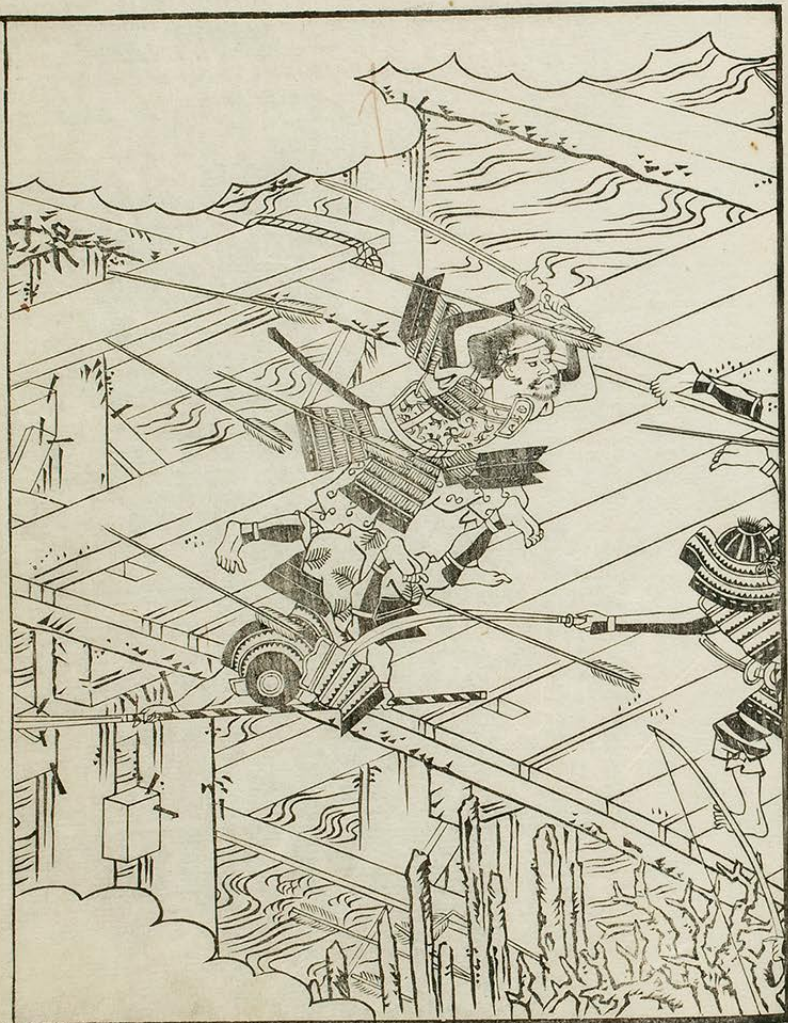
あはれなる夏は

春すもふはぬし 白く(の
こは)うせりあまのうや

[illegible]

[illegible]

所あるは、ひまゝに作らるゝ天智帝の御時
 愛の采女の後をせしむる大友皇子は、所信に即ちおためられ
 り流直すは後と所行客にても大海へ皇子は其日出家にほひ
 りて帝所知無名となりて吉野の宮に入りて中つ時より
 大海へ皇子は菟道まで進みなりて命を絶れり或人大海へ
 皇子の言をくきせたりは虎は翼につけて飛つやうなり
 ひろくやせしや其おも大友皇子の内裏の西庭にて織女の
 佛像の前におりて其座また大友我妻兄右大臣中臣金
 連我果安巨勢人長等よりひろ大友皇子天位ハ既ニ
 我々定まりて諸君の内は内服せよものも所んと思望ありて
 て佛前の香炉を執りて誓くのたまひ今内より
 五人とも父天皇の詔にけり我今日より儲の君さんとすし



アレタハワトハレチハシ
 朝多野郎格。シハ
 櫓白。サユ。カヤ。本
 河上。左。七。望。我
 軍。達。解。踏。多。敏。
 夢。甲。子。万。人。章。
 彼。東。南。海。將。安。
 一。降。軍。あ。下。男。
 從。軍。付。
 召。索。

菟田の郡に至る時伊勢の貢米に負せし。駿馬五十匹引つぎぬ。
 引連し其の意く其馬に奪ひ米に棄てし。歩む人のくせ。
 大やうふといふく日既暮り山道暗くしてくみりの自由。
 かくしりれ氏家の垣を壊ち木咄く。夜半の須隠の郡くむ。
 かくしりれ火に奉く邑中の者も眠りく。天智帝の自まふ。
 赤國のくせにやうく人夫も早く赤まふををれとく。
 命をひいてくものなうれとせんく。道にうきく伊賀の郡。
 かくしりれ當國の郡司等数百人引つぎぬ。高市の皇子も。
 今れすくもに伊勢の鈴鹿よりく。たすひりく國司宅の石床。
 等五百人を率て所方く外王かきり大津皇子并々惠人か。
 所付は後りれを供奉のく。力にうきく勇みすく。村岡男。
 天皇の軍兵三千人を奈く。不破の道をく。塞き皇子に。

まゝとく進すすむ素もと庵あの邸家ていけはつりて留とどめ布ふ ぬるこゝは日ひ清きよ海うみし
 れも一ひと間まは山やま背せ部ぶの小田せうでんぬひ安斗あんとの阿加布あかふをせりく東海とうかい道の軍いくさ成なり
 奈な一ひと推おし搦なの五百いほひ部ぶ止との馬うまぬけりく東山とうざん道の軍いくさ成なり奈な一ひとの
 こゝれく大海おほい人の皇子みこ子の所軍せん勢せはく盛さかるるなりきりし時とき大友おほ
 皇子みこ子こはひく江えの朝廷てうていより群ぐん衆しゆも大海おほい人ひと皇子みこ子こ吉野きちの城しろ出でく
 東國とうこくは入いりしすけりて大おほは愕おどき或あるく東國とうこくは付つく降くだふ人ひとと
 ろひ又または山澤さんさくは逃にがはれし人ひとおひしなり人ひとのさうくは京中きやうちゆう
 大おほは驛えき動どうやう時ときは人ひと大友皇子おほともみこ子の所ところおはむとてや遅おそく謀はからんと
 懐いだき作してゝあきく健そとなり驛馬えきばの兵へいは侍まつり大海人皇子おほひとみこ子の所ところはより
 ちりけけしとてあうとすめなりしれも大友皇子おほともみこ子こは諫いさなふとて人ひと
 たりたりし其そのしやゝぬきとてより軍ぐん隊たいさきくならしむ間ま
 大友皇子おほともみこ子この大將たいしやう大伴馬來田おほともみこ其その弟あに吹負ふきおも時ときの勢いきさつはそて大海人おほひと

皇子は淳和、大尾張の國主小太郎、鉦釣も二万騎を引率して
大海人は所方より少く大友方の軍勢は氣配あつた
時高市の皇子大海人の所方より少く大友方の軍勢は氣配あつた
ゆゑ遠くへ逃げたりし便り、平く近き所とて移さず
野上へ遷すに、市白子系もむくたす、かくて阿閉
磨置始連等河大の、数万騎を引率せしめ伊勢の大和河
越へ大和へ向せ村岡男伝等、数万騎を引率せしめ伊勢の大和河
直へ近江の都へ攻め入り、めりり吹負軍勢一番に進く大友方の
勇將大野果安、相戦ひお負く川退く時、男伝等、大友方の渾
息長横川に戦く、これを大友方の敵の大和河、討たれり、
亦く直く進く所田に至る、時大海人皇子の所方の兵もこれ

赤符をつけり、れを殊に元、うろく入り、うろく大友皇子の
群れは將、勢田の橋の西へ陣河たてら、其陣
太く、ね、間、旗、旗、覆、煙、塵、天、下、を、か、け、り、勢、田、の
橋、板、を、截、り、と、お、と、う、り、く、と、一、枚、の、長、き、板、を、お、お、軍、其
板、を、踏、り、と、せ、あ、の、り、と、板、を、り、く、河、の、中、に、墮、さん、と、
且、亦、強、弓、の、者、松、設、け、列、ひ、て、射、く、矢、雨、の、と、大、声、と、大、
軍、を、り、め、と、これ、の、大海人皇子、大友方の軍勢、た、や、う、板、を、後、に
り、す、く、暫、に、あ、ら、ひ、り、や、男、伝、ら、部、の、大、を、推、ま、る、の、者、武
勇、三、軍、は、冠、り、り、り、一、人、す、く、お、板、板、と、踏、く、馳、抜、り、り、
う、の、引、り、す、く、橋、を、設、け、り、長、板、の、個、を、切、く、直、く、大、友、
の、中、軍、へ、倒、り、り、り、と、大、友、の、軍、勢、は、驚、き、馳、走、り、り、大、友、
皇子の先鋒の大將智る太、怒て進ま、る、の、所、方、の、軍、を、倒、す、り

[illegible]

金鳥臨西舍

鼓聲催短命

泉路
魚賓主

此夕誰家向

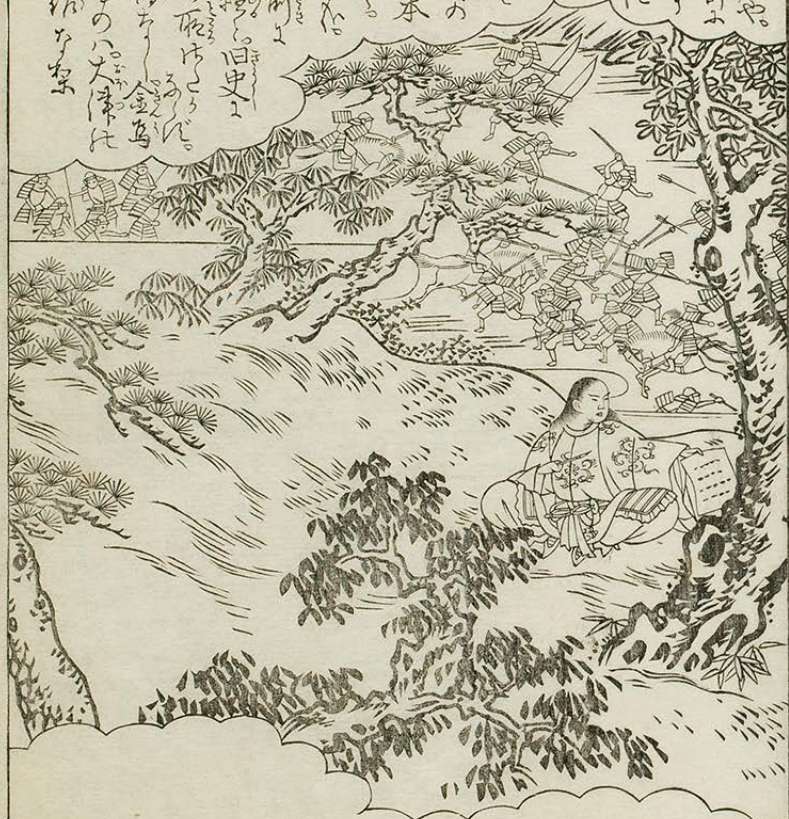
此詩のうらゝ金鳥の日のゆくゆく西舎ののやうにゆくゆく日影の
西のやうにゆくゆく鼓を聴かぬ位に軍情もさあけぬもの
今今の令嬢もさうやうなやうなと氣路のゆくゆくさみ
冥途のゆく實の客主のゆくこれら冥途は赴くまゝちの
ちのゆくゆく夕花のゆくゆくひくと作せたまふ

さては叶^め當^あましく大友皇子の所方^{ところかた}なり左右の大將^{さゆうのだいしやう}及び群衆^{ぐんしゆ}皆^{みな}向^{むか}うせむ物部連磨^{もつべつれんま}舎人^{とねり}一人をうけ討死^{うちし}の由依^{よしよ}を授^{あた}ひる
るもく大友皇子はすきなきなり叶^めし眼中精^{がんちゆうしやう}く耀^{くやう}く常人^{つひのひと}の
計^{はかり}なきもすす足^{たり}せぬひ天性^{てんせいのあまぎ}明^{あき}く悟^{さと}くいけかる
所^{ところ}なり學問^{がくもん}を好^{この}ませぬひ武^ぶの才^{さい}も通^{つう}ぬひる兼^{かみ}て才^{さい}と情^{じやう}
威^いと誇^ほるすい道徳^{だうとく}を修^{しゆ}る情^{じやう}めなりす其終^{そのはつ}とよせす
るも廿五^{にじふご}歳^{さい}くわくをたぬひこうひりれくて大海^{おほうみ}へまゐ
大友皇子既^{すに}亡^{はろ}ひなりは近^{うかこ}江^{かう}の朝廷^{てうてい}の群衆^{ぐんしゆ}の中^{なか}大友所方^{ところかた}
なり右大臣^{うでだいじん}中^{なかつ}連金^{れんきん}左大臣^{さだいじん}藤^ふ我^が赤兄^{あかあに}大納言^{だいなうごん}巨勢^{こせ}比^ひ等^{とう}と
り捕^{とら}て斬罪^{ざんざい}を處^よし其子孫^{そのこそん}とも國^{くに}を流^{なが}しぬひ羽衣^{うのえ}の
帝位^{ていゐ}に即^{つぎ}れすつこも天武天皇^{てんむてんわう}よりなり又其^{また}所^{ところ}死^して皇
后^{こうご}よりさして天武天皇^{てんむてんわう}所^{ところ}在^{ざい}位^ゐ十五^{じふご}年^{ねん}して朱鳥元年^{しゆてうげん}九月^{くがつ}は

大友にやうくはなると
 國詩賦の氣和ふ
 文武は枝幹合ふ
 あなづけは枝の
 もれあつてや
 肉ををえふ
 多う。孫ふ
 天を氷
 天を氷
 帝をて
 呂力大伯
 延慶の多子
 けいふふ
 みくをいふ



史筆思ふ
 觸るとふ
 關をに
 似うて
 懐風藻を
 撰ぶ水府の
 史に論ふ
 ひふふ
 白子山前
 浮きそ
 あれは
 且臨海
 金島
 大津に



浄御所のあはれて崩れしは皇后とて、御姓はよなひて
萬機の政を聴せたまふは皇后、天智帝第二の所むすめなり。う
め、齊明天皇の三年、文武帝、大海人皇子とやなます時
所記、なほひて草壁の皇子とせたまひしは、大友皇子の乱
の時、文武帝も吉野より東國へ逃れせたまふ時、所記
なほひて女がも軍議よりつりたまひ、太平のな皇后とせ
たまふは皇后、所記、沈流とてあはれ、大度より
故、改道の大より、つれて文武帝の輔佐とせたまふは、
今年、文武帝崩所、なほひてあかぬぬとて、つりたまひ
たまふは、所記、所記、なほひて草壁皇子と帝
位は即ち、なほひて、天武帝第三の所記、大津皇子
やなます、これい皇后の所記、大田の皇女の所記、なほひて

は、大津皇子、けがらふより、所記、大津やふく、学問とたまふ
博識、文雅、仙詩を賦、壮をせたまひて、文武
なほひて、所記、強、剣術、なほひて、力、つり
なほひて、兼、謀及のなほひて、新羅より、僧行
心、つり、皇子の謀及の所記、なほひて、君、人、の、相、
す、なほひて、貴相のなほひて、位、なほひて、
なほひて、所記、身、を、なほひて、なほひて、
なほひて、所記、なほひて、なほひて、
殺、なほひて、なほひて、早くも、其、なほひて、
なほひて、皇子の草壁皇子、なほひて、急、大津皇子、所記、
なほひて、大津皇子、なほひて、なほひて、
なほひて、草壁皇子も、早世、なほひて、皇后、國、なほひて

先祖はすのり
 かくす天武天皇
 の白鷹九年より
 集るる秋万葉
 死去の幸ハ聖武
 天皇の神龜元年
 二月廿一日林
 家の國史実録
 小見

杵本人麿

あひさげやうちの
 尾のしるしをうけ
 らるる心よめ

拾遺集恋部はむあしきりあひさげ山
 枕詞山さの尾いあしきりあひさげ
 かなさけりさねといふぬすめり
 うろくは秋の趣意いた長き夜と侍人あな

ひさねすめり歌ふたうなるは里川の山さの尾のな
 外のり梅うそいひけうを序歌しとの古今集がもつこ
 け作の歌は

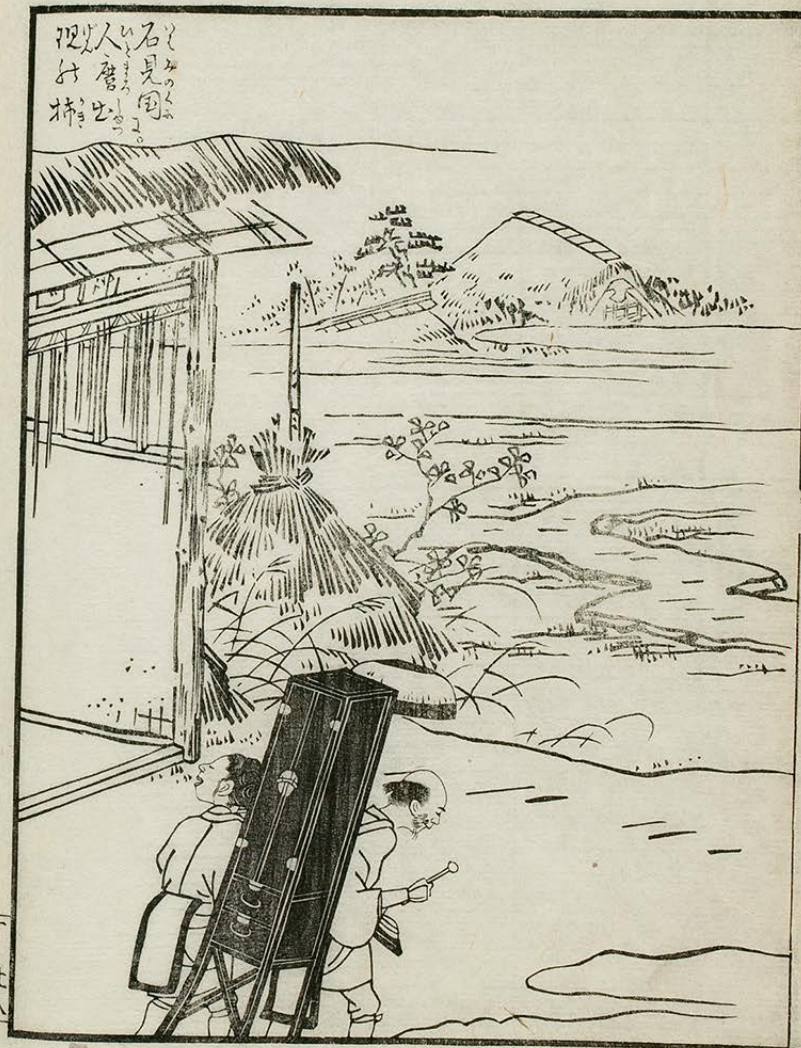
杵本人麿の話

孝昭天皇の皇子天押帶日子命の子孫十六氏よりあつち中
 杵本の姓は里さ姓のり新撰姓氏録は敏達天皇の時杵本の
 臣より人よりれ其人の家の門は杵の本よりり故に姓は
 そのころより其は天武天皇の時杵の姓は杵よりり人
 りよりれ人れりりの親族よりりりりりや又續日本紀聖武
 天皇の神龜天平の間は杵本の姓建名よりり人よりり外
 五位下は叙せりり又杵の濱名よりり人又市守よりり人かいつても

五位上より五位下は叙せしむるに人丸の
氏族なり。一、わゝ家系なり。一、其評なり。とあす
万葉集の外は詩人のものとあはるものなり。依集よりこれ
考へ、持統天皇の時代の始る石見の國より都のなり。文武天皇の
時代の末より石見より下より死せしむる官位は古今集の序より
止る位より止る位なり。死ねの贈位より存するに至る
卑賤なる人より死ねの位より死ねの位なり。新
田皇子高市皇子なり。一、石見の國より又帝の供奉して起る
伊勢の山雷岳吉野なり。一、石見の國より石見の國より著る
歌より石見の國より石見の國より著る
或書より石見の國美濃の郡戸田の郷小野より所は綾部氏の
あり。石見の國の折の折の下は神童なり。石見の國より我

又母なり。唯風月のことと敷島の道なり。夫婦より
いゝことを授けしむる石見の國より石見の國より著る
一、語合氏より其家九四代血脉綿より相傳へる長
あの人より石見の國より石見の國より著る
人丸出流の折の折より石見の國より石見の國より著る
里の石見の國より石見の國より著る
折の折の折の折より石見の國より石見の國より著る
折の折の折の折より石見の國より石見の國より著る
京より上より石見の國より石見の國より著る

大和本州曰
山柿葉如稗
而實大如棗
而圓味如稗
柿而裨之



次の歌ハ石見まゝいささなる道とへそなたはひめてむがしと體とん
くも雅——こゝそ其石川は雪なりともたちとれうとを面影
んく慕んていめこそ又いのちういひ供へん九の辞世歌
石見のやま角やうの本のふりうとせの月とんとていれ
よ——せうけうけうこれハ万葉集の石見國より妻よとれて上
ハ長秋の末の反歌也

石見のやまの山のふもとにゆもろく神と妹はいんり
とつ。秋の末は——つもの——人丸の辞世の——いささな
こゝき世の月——秋ハ二条禪園のち約語圖ハ人丸の秋のうせれ
いれと早くうの腹めり——いひ供へてそのが——又はせもて
人丸の祠よりもの——いささな石碑が——いささな
其ところハ住まう——いささな秋は——いささな

藤原清輔のいさ大和國ハ下向せ——時彼心の古老の氏の——添上郡の
石上寺の傍ハ社ハ春道の社——称す其社地ハちり——村本寺と
称すこは人丸の祠堂なりうの社の前の田の中よりいさ塚らう人
丸塚ハ称す——いさ塚の土民のいり——いさ塚のいさ塚のいさ塚
りハ春道の社ハちり——いさ塚のいさ塚のいさ塚のいさ塚
のちいさ塚なり——いさ塚のいさ塚のいさ塚のいさ塚
わつ其銘ハ村本朝臣人麿墓——書——うの裏ハ佛菩薩の名号
経教の要文ハいさ清輔の姓名と書うの下ハ和歌とていさ
世とていさ——いさ塚のいさ塚のいさ塚のいさ塚
いさ塚ハ人丸石見のふり死にす——其屍を和わう
せう其例ハいさ——いさ世の釋教者のいさ人丸石見ハいさ
いさ塚ハ諸書ハいさ——いさ塚ハいさ塚のいさ塚

其彩供の儀式に當日彼真影の前は机置く飯一杯並は菓子
 種々の菓子との建御所なり今日の令より伊孫守長実の女
 子に侍るなり安土に佐伯の女が嫁つて居るなり佐伯の
 女は大學に嫁ふ教先少納言宗兼が和京も道安藤も女
 忠孝し次は春膳の女に次は初献の女等器の皿小鉢子とて
 簀子に候す其後嚴重し勸盃を白き唐紙二枚よりして
 佐讃をひらき文書に置くこれに講次は和歌を誦す今日の
 通冠の水風晚来より孔く人の歌十三首よりこれとて
 世和歌の令より人丸の歌をわく温觸より一といふ

山部赤人

山部赤人
 山部赤人の歌
 山部赤人の歌

新古今集冬部はむさしすはるす秋はり万葉
 山部赤人の歌
 山部赤人の歌

先組つしりりり
 山部赤人の歌
 山部赤人の歌



とまれつゝその人の歌しるは新古今は直しく入
らざるがしゝあれと先万葉の歌を解し
たのゆゑはたのしき事とて後には盧象昇の田記
の満ちてあつたれはうらやまのさきこゝの雪の
ふりやうもふりやうもふりやうもふりやうも
田子のくちやあつたれはうらやまのさきこゝの雪の
くすくすやうもふりやうもふりやうもふりやうも

山部赤人の話

母舅の古今集の序は人丸赤人の序とて赤人の人丸
赤人の人丸赤人の人丸赤人の人丸赤人の人丸赤人の
二聖と稱する人もあつたがその人丸赤人の人丸赤人の

万葉集の大伴池之の歌の序は人丸赤人の序とて山部赤人の
これと既其代は人丸赤人の序とて赤人の人丸赤人の
位階は人丸赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
いゝ赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
いゝ赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
記の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
いゝ赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
珠は赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
いゝ赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
家持は赤人の序は赤人の序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の
十ののりかたを其序とて赤人の人丸赤人の人丸赤人の

又祖官位とに
つすりつかりす
或説は元明天皇
の時の人なりとい
つハ續日本紀に
本わたり佐留
るいひやまうと
大夫といハ良人の
稱古今のすま名
序は抄本大夫
うてかきり
のまうちきし
よせり

猿丸大夫

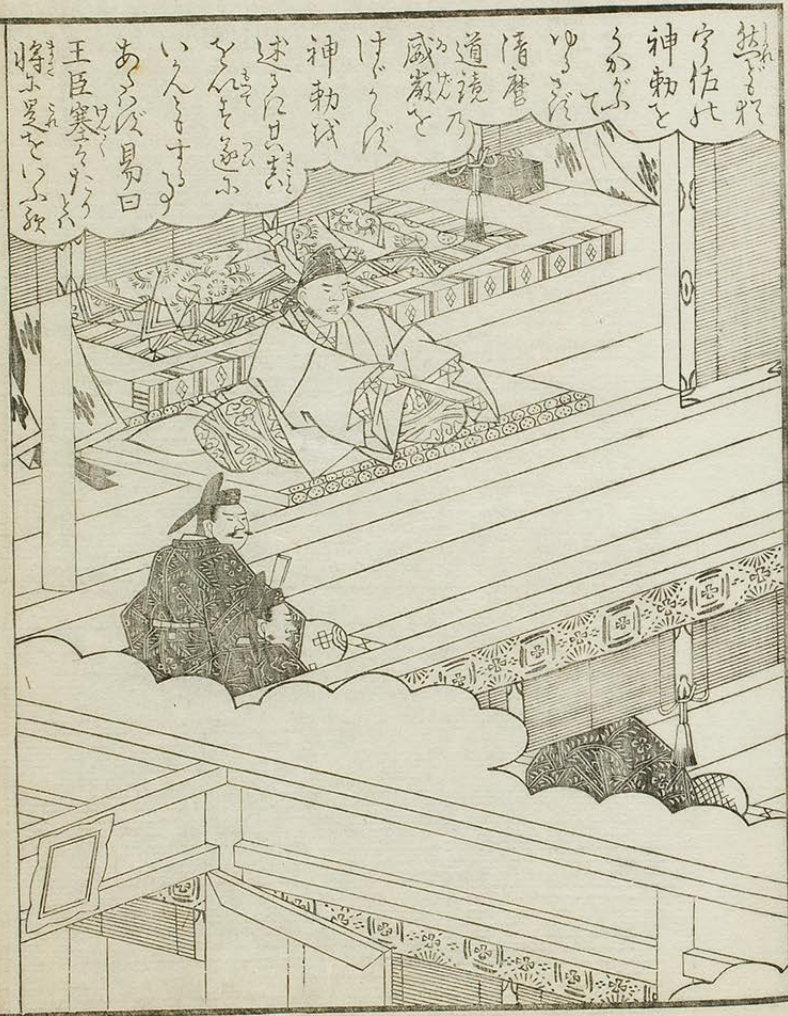
梨やいりりあけ
がりのふきり

秋なり

古今集秋部は是夏のみとの家代秋合のこトク人
あすいり秋のころハ奥山は散きこてあけ
の中をやけくわらる座のあけつ時き
秋ののりき至極の時節なりといふ

猿丸大夫の話

古今集の真名序は太友の里まの飲はる猿丸大夫の次男
いり黒主ハ光孝天皇の仁和年中の人とありハ奥山よりち
わけていり飲ハ光孝天皇第四の所子の是貞親王の家代飲
合まるとありすの飲なりと今猿丸大夫の飲してこれ飲
まは不審なりといり其故ハ黒主猿丸大夫も仁和の頃の
人といふは古今の真名序は黒主のの成評するといは
への猿丸大夫の次といふきやめされは飲ハるといふ
人ありすの飲はる猿丸大夫の化といふと一とそけ人も
いり又祖もつすりつかりぬ人なりといふと宗祇の百人一首に
は猿丸大夫を弓削の道鏡と号すといふといふ程の妄説



伯夷叔齊はくゐしゅせいとて、いけの山も隠れ入る。一と云ふは
磨あをりて忠直の人かれと云ふ豊水二言を感じたり。そて宇
佐うさ諸都海王帝奏みくにのみかみびたり。清磨八幡大神の御託と
承うけたまはりて我國天地開闢よりこの君と臣とのちちの
小定こさだめ早ぬおと今道統まで通して轉々帝位をなすこと
以て神靈怒く其祈所歎す天津日嗣阿弭乎皇統の人を以
て一としての御託をのぞき、松江より奏され朝延に
参ひたり。百官百日は磨る言知つたものおぼす冷汗を流
り、時は帝の黙然としてわたり、道統は言知つて大に怒り、
磨と穢磨と改名して太陽のふに配流せられ、また天にも道
鏡みかど威勢は恐ろしくこれ沢支ゆへにならう、其ね宝龜元年
二月帝は因の由義のふりす、いふひり付道統怪し、こ

食物河帝はすめまふりれどもよく龍を道鏡なまけ
りのかれをもくつひだるもほきうめしてよく所悩は臥させ
れしひ翌日の四月は由義のまゝ都よりたすひといひ予ら
あやせられしひ今年八月は朋所介よりわさ藤原百川とぬ
系良継と相まうく天智天皇の弟孫白壁の五十二歳に
がせられしと皇太子とくはへ帝位は即ちなり是
すれより先仁大をくみて通鏡は現に先帝を弑しむる
大逆の罪なりとも先帝の親をわたりぬけよの位を懸
下野國薬師の別當として即日配所をせんされり奈末所
ちてきて死しり大逆無道の道鏡を猿丸大夫のと
するゆかりなる附合の儀は今猿丸のころつけく道鏡のふ
いひ彼事位の甚きことを思女の輩は已ききとせんかめ

祖父大納言佐二
佐母鷹父大納言
後二位藤人姓大
伴（つ）孝房（天）
皇の天平十七年
後五位下室魯土
手參議（佐）元
仁天皇の天應元年
後三位桓武天皇
北曆元年參議
宮大夫華蔭奧按
察使鎮守將軍
同二年中納言同
四年薨す

織女は、すうひ付て、起るく皇國へも、きりぬきてきの
のねの指が、飲まなく、散の指ととも天上へ行く。指のもつち
うあゝゝ帝天ありや、さう禁中のものかすや、天上へよ
いもやもももも、因り故わさるゝ指と禁庭の序殿（上）序階
のものはなれども、せうふれまは、飲のころハ禁中は宿直してある
夜は禁庭の序階のほうに置き、たゞ指の中よりなる紙をえま
しむ。おのづからなほなほ、

天應元年十二月、先仁天皇崩。たすひつれを第一の皇子山部
 の親王、即位。つぎにふくれと桓武天皇をうむ。なるまうは延暦
 元年、国正月、氷上川、継謀反。せり、川、継、八幡、焼。まの、子、こ、これ、う。

先二川継り備人天和のし人よりもの兵器を推のてひりて禁
中より所月とふと捕推同す人より主人川継隠謀を企て
今月十日の夜後堂とあつめ北門より攻め朝廷を侵し人
とす故下官を以て謀友の方人より宇治の王と名將の彼日限
を定人しせしむ白状は及び人より帝よりひきりたる人
はひ急し勅使を遣ふ人より川継をのこりて川継勅使の到
しひひりて後つてひきりて重き官使をひきりてこれを
捕へて拒武希詔し人より川継潜は乱れ謀をくくる色は
發覺す其罪極刑に合す人より先帝崩御より後保康のそめ
り人哀感の情やひきりて人より川継は罪を免て伊
豆の國は流し母の不破内親王并は川継の姉妹を侍ひ居す
へし令せしむ人より時家おも川継は一味のやつたり人

其実否はし人より人官に集りて都の外はとやれり
ふもは人其よりけり人より宛の罪とのふりて人
大夫は伊やとせり人より時奥物の奥城やとす人より乱を起す
人より家持と陸奥の按察使鎮守將軍は伊やと延暦
二年より人鎮東將軍とやと人より時家持上言せり人より奥の
の名取郡より南の十四郡山野の地より陣營を去りて人より急
軍勢に徴する機曾より人より人より權は多賀郡階上郡の二郡
を置百姓は募り集めて國府にめを東西の夷賊を防ぐ
便し人より人より人より人より人より人より人より人より人
訴へり人より人より人より人より人より人より人より人より人
かりぬ人より人より人より人より人より人より人より人より人
さふ當帝の皇太子早良の親王より人より大付の継人大付竹良

西人は令て中納言藤原種継と殺害せしむるを都の内騷動
せり種継より人の位宇合つて帝の寵を以てしむる
故天下の人心を以て意は任せて内外の時種継は
皇太子早良親王とこれを悪く憤りたすひて常種継
帝中不和なりしを兼て種継とてかりんとおほめ
今年八月天皇早良親王のまゝに種継とて皇太子と種継
と小都の留守と令せしめられし隙を以て早良親王は
竹良とて種継を伺ひ狙ひめられしひとは一々種継燭
のりて種継を以てつゝりしとて種人竹良ひろふとのり
種継は胸板を以て突く射徹しられ種継は其創より翌日死
つゝ天皇早良親王のまゝに種継とて皇太子と種継
幸ひて種継は横死と傷せられしひとは一位を賜ふてこれを

其れめ種人竹良并に其徒數十人とを捕く推問せめねし
早良親王はれされし種継を殺害せしむる白状をいれ
やう種人竹良と斬罪を以て皇太子早良親王と廢して種
継はなす初め種人等究明はつりし時つゝ大伴家持首
謀るはつりしやう故に家持は名籍を削ぎ其子永主と
隱岐國に流罪せしむるもはる教を以て種継は
其は種継天皇崩御の時遺詔にれしつゝつゝ種継は
と中の位は復されし日本紀畧にれしつゝ種継は家持
悪名とてしむるはつゝ種継は實のつゝ種継は家持
とてしむるはつゝ種継は實のつゝ種継は家持
今其集と考(且拾芥抄に載しつゝ種継の定めの説は種継と

[illegible][illegible]

あづき
安倍仲麿の詔

付^つ古^こく遣^{けん}唐^{たう}使^しとて皇^{わう}國^{こく}より才^{さい}智^ちの官^{くわん}人^{にん}を撰^{せん}てそりて一
の當^{あた}ひに任^{じん}さるゝ所^{ところ}なりしうち大^{だい}使^し副^ふ使^し判^{はん}官^{くわん}主^{しゅ}典^{てん}で
四人^{よにん}を四^し艘^{そう}の船^{ふね}のちかくけらるゝ例^{れい}なりとて遣^{けん}唐^{たう}使^しのやうに
川の船^{ふね}に於^おきて元^{げん}正^{せい}天^{てん}皇^{わう}主^{しゅ}の靈^{れい}龜^き二年^{にふたとし}六月^{ろくがつ}多^{ただ}治^ぢ比^ひ真^ま
縣^{あがたし}守^{しゆ}と押^{おし}使^し阿^あ倍^{べい}朝^{てう}臣^{しん}安^{あん}磨^まと大使^{たいし}藤^{とう}原^{げん}宇^う合^か松^{しょう}

鼎守相傳

副使ふくしとして唐へ往るなり。其時下道の真備まへが、又安倍仲磨あべのなぐさと留学りゅうがくするに違唐使の諸しよに、
人として其時仲磨なぐさがなり。其は十七箇年しちかへんを居て取次とりぐさ文
主の天平五年四月ていへいごねんしがつより多岐比廣成遣唐使として、
廣成田の村仲磨なぐさハ唐朝の風俗を知らしむるに、
其より吉備きび公より廣成ひろなりに送りし書より吉備きび公十九の
間唐へ往りしに、
の軍制陣法并に儒藝にうぎものをも、
其より其時唐禮百二十卷大衍曆一卷を成十二卷孔子及び十
哲の像、影、鐵、尺、鐵の方磬、律管、樂書要録、弓箭等をも、
唐ハ唐朝は残して、
唐玄宗皇帝ていせんていに其志を告げしを

朝衡と改めさせ左補闕の官に授けし儀王の友とせし
 秘書校書の官に遷られし又十五のは老謙帝の
 天平勝宝二年遣唐使と定めし此は藤原清河を大使と大
 伴古磨と吉備とを副使とせし是より同き五年正月遣唐使の
 人々唐朝に入りしと玄宗皇帝蓬萊宮に於て外國の使者との儀
 見せしけり日本の使の座と蓬萊宮の西畔の第二吐蕃國の
 下役の新羅の使の座は東畔の第一大食國の使の上の役とるを
 又副使より大伴古磨これに倣ひしなり新羅ハ
 吾日本へ貢賦をよみし今日新羅の使ハ東の上の列へ吾
 王の使の下の列す不快なりしなり唐の大將軍吳
 懷宝古磨を肯せしむ新羅の使を引く西畔第二
 吐蕃國の下の列日本の使と大食國の上の列せし時玄宗

仲磨少令しんご一々ひと今交の遣唐使と接待せりあまをうそ清河
日中にちちゆうの仲磨もぬれせんといふ家けふもあはひてぬれ
る時平生交はむすむ詩人文人は書成ふも仲磨の
其の文苑英華唐詩品彙事のせうもれと仲磨の
友より王維包信趙驛しんごが文苑化しんごく贈別せり既すは舟
中ちゆうて明州より海うみをすてゆく唐人飲別の宴と認て
仲磨はりて夜より海より目めのあふの
よれよ國音通こくおんをう唐人も其の意と解す
漢語かんごの譯やくくえきをれといふも感嘆かんたんは
るる明州と出航しゅくかうもはうす海より難風
あひ既すは魚腹ぎよふくは葬そうれんとせしめり安南國あんなんこく漂ひう
り清河きやうがより再唐朝さいたうてうはく其の時仲磨しんごと吉備公

つが
とハ恙やぞ 海うみのやうな ち磨あ日ひの 海うみの 難風なんふう
あひ満みち 風ふうす 事こと白しろハ 詩しハ
里さとく 其詩そのしハ

日本晁卿辭帝都

片帆百里繞蓬壺

明月不歸沈碧海

白雲秋色滿蒼梧

日ひ卿きやうとハやま仲なつ磨ま唐たうとやま以も序しよとやま朝あさ衡かうとやまソやまひひとやま朝あさのの字じとやま昆こんのの

字と其音通す。飛鳥嘯ともソひく。そ仲磨ハ難風の災をのれ

あすの
安南^{あんなん}に
唐^{たう}の
船^{ふね}に
乗^{のり}れ
て
宋^{そう}の
の
く
官^{くわん}に
授^{あづかる}

りて子蕭宗自帝の代より
く上元年中は仲麿と左散騎常

侍安南都護より官又擢りて又光祿大夫御史中丞北海郡開國公

轉せし三千石の倉邑にけりて、
 肅宗の所子代宗皇帝

大曆五年 丙子 七月 丁酉 唐 李 華 卒 于 代 宗 又 潞 州

大佐日記曰。昨日朝月
 出。多雲。日。むじ
 雲。居。仲。唐。と。し
 々。人。あ。こ。に。と
 々。か。う。さ。き
 け。舟。に。の。る。き
 々。悠。ろ。い。く。人
 々。れ。あ。い。さ。し。



如。お。人。は
 々。ま。い。く
 ち。ぼ。え。ん。ど。
 こ。し。れ。こ。も
 々。に。
 け。さ。と。を
 して。こ。れ
 こ。は。つ。こ
 なる。人。ふ。い
 々。せ。つ。れ。ど。
 ん。や。う。え
 々。う。人。い
 お。い。の。か。に
 あ。ん。で。



唐書地理志曰
 明州。属。江南
 道。開。元。二十
 六。年。置。以。境。都
 四。明。山。為。名。

遣唐使。非古帝十
 九年。け。えて大津
 獲我妹子を
 使。て。信と
 随。通。で。も。
 唐國史に載
 たり。や。中。
 仲唐ハ唐の玄宗
 の時。て。使
 こ。く。文
 け。中。て。孫
 右。や。つ。ふ。
 云。望。山。一。章。
 了。地。の。新。わ。
 う。れ。四。方。に。使。
 君。乃。今。を。尊。
 し。や。い。もの。う。
 後。の。行。け。所。



海上颶風ふ。あ。
 安南國は。南。に。
 安。南。國。は。南。に。
 安。南。國。は。南。に。
 と。や。い。は。地。新。

武備志曰
 安南。唐。唐。時。南。文。也。
 素。為。象。郡。後。移。南。越。
 道。陀。據。之。武。帝。年。南。越。
 置。交。趾。九。真。日。南。之。郡。
 中。武。時。女。子。徵。側。徵。威。
 多。烏。樓。討。平。之。建。安。中。
 改。為。交。州。置。牧。唐。置。通。
 都。護。府。改。為。安。南。



百人一首一夕話卷之一終



